

Title	単純接触効果における知覚的補完の影響
Author(s)	富田, 瑛智
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60015
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	とみ た かき とし 富 田 瑛 智
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学位記番号	第 26067 号
学位授与年月日	平成25年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学位論文名	単純接触効果における知覚的補完の影響
論文審査委員	(主査) 教 授 森川 和則 (副査) 教 授 芋阪満里子 教 授 赤井 誠生

論 文 内 容 の 要 旨

単純接触効果とは、刺激と繰り返し接触することでその刺激の評価がポジティブに変化する現象である。人間の選好形成は様々な要因によって決定される。選好形成要因の一つである単純接触効果は単に接触を繰り返すだけで生じるという非常にシンプルな現象であるため、日常場面で頻繁に生じている。そのため、この単純接触効果が人間の選好形成に大きな影響を持つことは明らかである。

単純接触効果は多くの研究が行われてきた。その中で単純接触効果に影響を与える様々な要因が明らかにされ、幾つかのメカニズムの仮説が提案されてきた。しかしながら、ほとんどの仮説は反証が示されており単純接触効果の生起メカニズムは明らかになっていない。この問題は単純接触効果研究が接触刺激（反復提示される刺激）と評定刺激が物理的に同一な状況で検討されてきたため生じたといえる。

日常場面では接触刺激と評定刺激が同一と認識されても物理的に異なる場面が多くある（例えば、どちらかの刺激の一部分が隠れているなど）。それに対して、接触刺激と評定刺激が意識的に同一と認識されるが物理的に異なる状況で、どのように単純接触効果が生じるのかはあまり検討されていない。また、このような場面での刺激同士の一貫性の認識は、接触刺激により形成された脳内表象と評定刺激が一致する否かにより決定されると考えられる。しかし、多くの先行研究では、接触刺激と評定刺激が物理的に同一である状況で検討されてきたため、単純接触効果が物理的に同一な刺激に生じるのか脳内表象と同一な刺激に生じるのかが区別されてこなかった。

本論文では補完現象であるアモーダル補完を利用し接触刺激の物理的な視覚入力と接触によって形成される脳内表象が異なる事態を設定した。アモーダル補完は部分的に遮蔽された刺激の遮蔽部分が補完されて知覚される現象である。この現象下では刺激は視覚的に入力される段階では遮蔽されているが、脳内表象の段階では遮蔽部分が補完されて全体形状が知覚される。この現象を利用し、接触刺激と評定刺激が物理的に一致する場合と脳内表象と一致する場合のどちらに単純接触効果が強く生じるのかを検討した。そうすることで、単純接触効果がどのような対象に生じるのかを明らかにし、単純接触効果の生起メカニズムの提案を行った。

論文は5章から構成された。1章では単純接触効果の概略及び単純接触効果の初期研究としてZajonc(1968)の研究を記述した。Zajonc(1968)の研究は後の多くの単純接触効果研究が実験手法を踏襲したことから、代表的な研究として取り上げた。2章では単純接触効果に関わる要因、代表的な生起モデルの紹介を行った。ほとんどの生起モデルは反証が示されているが、本研究の結果を解釈することで、これらのモデルを改良することとした。3章では現在の単純接触効果研究における問題点と本研究の目的を記述した。単純接触効果研究における問題点は、接触刺激と評定刺激の物理的な同一性と脳内表象との同一性が区別されていなかったことにある。この問題を解決することで単純接触効果の生起メカニズムを再検討することを目的とした。4章では接触刺激の物理的な形状と脳内表象の形状が異なる事態が設定され、実験による検討が行われた。無意味刺激、有意刺激を用いた際の単純接触効果の検討が行われ、意識的処理の影響も検討された。5章では4章における実験結果がまとめられ、先行研究との比較が行われた。そして、本研究の結果及び先行研究を考慮した際に最も適切な単純接触効果の生起モデルが提案された。

論文審査の結果の要旨

単純接触効果とは、刺激と繰り返し接触することでその刺激の評価がポジティブに変化する現象である。これは単に接触を繰り返すだけで生じるという非常にシンプルな現象であるため、日常場面で頻繁に生じている。この単純接触効果が人間の選好形成に大きな影響を持つことは明らかである。

先行研究により単純接触効果に影響を与える様々な要因が明らかにされ、幾つかのメカニズムの仮説が提案されてきた。しかしながら、ほとんどの仮説は反証が示されており単純接触効果の生起メカニズムは明らかになっていない。この問題は単純接触効果研究が接触刺激（反復提示される刺激）と評定刺激が物理的に同一な状況で検討されてきたため生じたといえる。

日常場面では接触刺激と評定刺激が同一と認識されても物理的に異なる場面が多くある（例えば、どちらかの刺激の一部分が隠れているなど）。そのような状況で、どのように単純接触効果が生じるのかはあまり検討されていない。また、このような場面での刺激同士の同一性の認識は、接触刺激により形成された脳内表象と評定刺激が一致する否かにより決定されると考えられる。しかし、多くの先行研究では、接触刺激と評定刺激が物理的に同一である状況で検討されてきたため、単純接触効果が物理的に同一な刺激に生じるのか脳内表象と同一な刺激に生じるのかが区別されてこなかった。

本論文では知覚的補完現象であるアモーダル補完を利用し接触刺激の物理的な視覚入力と接触によって形成される脳内表象が異なる事態を設定した。アモーダル補完は部分的に遮蔽された刺激の遮蔽部分が補完されて知覚される現象である。この現象下では刺激は視覚的に入力される段階では遮蔽されているが、脳内表象の段階では遮蔽部分が補完されて全体形状が知覚される。この現象を利用し、接触刺激と評定刺激が物理的に一致する場合と脳内表象と一致する場合のどちらに単純接触効果が強く生じるのか検討した。そうすることで、単純接触効果がどのような対象に生じるのかを明らかにし、単純接触効果の生起メカニズムの提案を行った。

論文は5章から構成された。1章では単純接触効果の概略及び代表的な先行研究としてZajonc(1968)の研究を記述した。2章では単純接触効果に関わる要因と代表的な生起モデルの紹介を行った。本研究の結果を解釈することで、これらのモデルを改良できる。3章では従来の単純接触効果研究における問題点と本研究の目的を記述した。従来の問題点は、接触刺激と評定刺激の物理的な同一性と脳内表象との同一性が区別されていなかったことにある。この問題を解決することで単純接触効果の生起メカニズムを再検討することを目的とした。4章では接触刺激の物理的な形状と脳内表象の形状が異なる事態が設定され、実験による検討が行われた。さらに無意味刺激、有意刺激を用いた際の単純接触効果の検討が行われ、意識的処理の影響も検討された。5章では4章における実験結果がまとめられ、先行研究との比較が行われた。そして、本研究の結果及び先行研究を考慮した際に最も適切な単純接触効果の生起モデルが提案された。

よって本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分価値あるものと認める。